中国トロツキー派の生成、動態、及びその主張

——一九二七年から三四年を中心に——

菊池一隆

【要約】 中国トロツキー派はモスクワの中国人留学生グループと中共から除名された陳独秀らを中心とするグループから形成された。双方ともスターリン・コミンテルンの官僚的指導への反発から形成されたため、民主を強調し、かつソ連の国益優先政策に対する批判を強めた。中共は、都市を離脱し、農村へと根拠地を求め、中国革命を最終的に勝利できる道を切り開くが、同時に民主を失っていった。それに対し、トロツキー派は上海等の都市に留まり、中国は「資本主義社会」であるが、民主が未完成との認識から民主を強く求めた。確かに、トロツキー派は都市、労働者を重視し過ぎ、農業国家・中国で農村、農民を軽視するという限界があった。だが、当時の中国共産主義運動を全体的にみた場合、農村と都市の双方をカバーできる勢力は生まれておらず、中共、トロツキー派ともに限界があったのであり、実質的に農村、都市を分担し、相互補完関係にあった。また、三一年九・一八事変後、トロツキー派は抗日ナショナリズム的色彩を強め、連合戦線の結成を呼びかけ、第三勢力と共同歩調をとり、福建人民革命政府、さらに両広事変、西安事変、抗日民族統一戦線への流れを創り出した。

史林 七九巻二号 一九九六年三月

はじめに

ソ連におけるスターリンとトロツキーの対立を背景に、中国でも中国共産党（以下、中共と略称）中央とトロツキー派の間で激論が闘わされた。この問題は中共の路線問題と密接な関係をもち、極めて複雑な上に、トロツキー派を社会的に抹殺するための中傷文献も散見し、事実の確定も困難な場合すらある。だが、中国共産主義運動の本格的解明には、中共総

書記時期の陳独秀、そして瞿秋白、李立三、王明、毛沢東のみならず、さらに視野を広げた形で中共から除名されたり、分裂した多数の人々の研究は急務であろう。なぜ、分裂するのか。主張点、対立点は何か。分裂後の活動はいかなるものか。そうした研究は分裂者の実態、本質のみならず、翻っては中共の質をも明らかにするからである。その中でも、トロツキー派は中共最強の論敵の一つであり、決して看過できないはずであった。

しかし、重要テーマにもかかわらず、研究が進展しなかった要因は上述の史料問題と共に、無意識的にもタブー視されてきた側面がなかったとはいえない。かくして、日本には専論はなく、僅かな研究も他テーマとの関連で論じられている。戦時中、(1)草野文男『支那辺区の研究』国民社（一九四四年）がトロツキー派を中共分析の一環としてとりあげ、影響力の弱い微細勢力とし、戦後は(2)横山宏章『陳独秀』朝日選書（一九八三年）が、陳の主張を李立三極左路線との比較で一定の評価をしながらも、毛沢東の農村革命より非現実的であったとする。中国では八〇年代に研究が開始され、例えば(3)劉沛漢「中国的托洛斯基主義運動」、複印報刊資料『中国現代史』一九八六年第四期は、同派は錯誤、孤立し、新民主主義革命の勝利で破産したと全否定する。(4)王学勤「陳独秀与托洛斯基主義」『中国現代史』一九八六年第一期は、陳が「二回革命論」を基礎に部分的にトロツキー理論を受容しただけで、結局ブルジョア民主主義者であったとする。(5)唐宝林『中国托派史』（東大図書公司、一九九四年）は、同派が国民党反対とともに、都市中心、労働者重視を教条的に絶対化し、中共の農村重視、農民主力軍に反対したため、国共両党の挟撃にあい、絶えず分化しながら五二年に消滅したとし、陳が理論探求に終始したのに対し、毛は実践・経験によってマルクス理論を再検討し、中国に適した「周辺革命論」へと発展させたとする。他に(6)鄭学稼『所謂〝托匪漢奸〟事件』国際共党問題研究社（一九七六年）もあるが、これは抗日戦争時期を対象としている。以上のように、アプリオリに全面否定する劉論文もあるが、王論文は陳がトロツキストであったか否かの議論を出し、特に唐は実態、全体像をかなり明らかにした。だが、結局のところ限界のみが強調され、唐にしろ毛との対比の中で消滅する必然性を論じている。そこで、本稿ではまず「善悪二元論」的発想を脱却し、トロツキー派の①生成、

②動態、③主張等を実証的に明らかにすることで、その本質、特色を導き出す努力をし、とりわけ限界や毛との対比のみならず、一定期間存在した必然性、当時の政治構造の中での位置、及び歴史的役割の考察に力点を置く。その際、事実確定が必要との認識から、主要四派の中で主張を直接知りうる機関誌を唯一入手でき、かつ最も影響力のあった無産者社・陳独秀を中心とするが、常にトロツキー派全体の動向を念頭に置く。なお、「中国共産党左派反対派」はトロツキー派の自称であり、中共はトロツキー派を「(革命の)取消派」等と呼んでいる。また、トロツキー派と国民会議、及び自由権要求との関連の詳細については別稿を参照されたい。①

① 拙稿『『国民会議』を巡る政治力学」、狭間直樹編『一九二〇年代の中国—京都大学人文科学研究所共同研究報告』汲古書院、一九九五年。

一　中国トロツキー派の生成

中国トロツキー派はモスクワで形成された。第一次国共合作下の一九二五年秋、孫文の遺志を継ぎ、国民革命を完成させる幹部養成を目的に、コミンテルンの指令でモスクワに孫逸仙労働大学(以下、中山大学)が設立されると、国民党要人は喜んで次々と子弟を留学させた。湖南、広東出身者が大多数を占め、北方出身者がこれに次いだ。二七年以降、学長はポーランド人革命家でトロツキー派のラデックであり、中山大学はその影響を受け、中国人トロツキー派を生み出す母体となった。ところで、従来、ソ連の少数民族やアジア・アフリカの留学生を収容していた大学に東方労働者共産主義大学(以下、東方大学)があった。当然、中国人留学生は中山大学の設立以前、ここに入学していたが、学長がスターリン支持のシュミアツキーで、両大学は校風的に対立した形態を採っていた。①二七年中国で四・一二クーデタが勃発すると、中国革命、国共合作問題を巡り、スターリンとトロツキーの間で激論が展開された。中国問題であったため、中山、東方両大学の留学生に極めて大きい影響を及ぼした。こうした時、一一月七日「十月革命十周年」記念祝典が赤の広場で挙行された。中山大学生梁幹喬、陸一淵らはソ連トロツキー派と共に、主席台の前を通過する時、突然「トロツキー擁護」「スタ

ーリン反対」の垂れ幕を掲げた。この事件はソ連共産党中央を激動させ、一二月一八日ソ連共産党一五回代表大会はトロツキーの除名を決定した。また、中山大学でもトロツキー派と見なされた留学生は学籍、党籍を剥奪され、帰国が命じられた。この流れの中で、ラデックも解任され、後任学長としてスターリン派のミフが就任した。[2]

二八年春には、いわゆる「江浙同郷会」事件が発生した。孫冶方によれば、孫らは東方大学で翻訳の仕事をしていたため、裕福であった。そこで夏期休暇に会食していた時、丁度、中山大学公社主任王長熙が通りかかり、孫の部屋にいたのが全て江浙出身者であったため、疑心暗鬼となった。この話が中山大学支部局に伝わり、「江浙同郷会」が成立したことになったのだ、[3]という。向忠発は、これが「反党小組織」で「蔣介石と結託して援助を受けている」と確信し、中山大学で講話したのである。その結果、学生に大混乱を引き起こし、結局、学生一二人の党籍、団籍が剥奪され、四人の逮捕者を出すに至った。この裏には、ミフの支持下で、中山大学学生党部の王明が事件を利用して、王明中心のスターリン派留学生の地位強化を謀る画策があった。だが、疑問をもったコミンテルン中共代表団責任者の瞿秋白は広範な聞き取りとともに、鄧中夏らに真相を調査させた。八月一五日中共代表団はソ連共産党中央政治局に対して「江浙同郷会」の処置に異論があるとし、同時に中共中央に組織的党派活動を確認できないとの書簡を出した。かくして、コミンテルン監察委員会、ソ連共産党監察委員会、中共代表団が連合審査委員会を組織し、調査に乗り出し、二八年秋「江浙同郷会」という反動組織は存在しなかったとの結論に達した。こうして、王明らのセクト活動は一定程度挫折したという。[4]

このように、「江浙同郷会」に目を奪われていた二八年八月、中山大学に中国人留学生によるトロツキー派の秘密組織が本当に設立されたのである。幹事会を最高機関とし、安福が総幹事で、范金標、李平、大福林らが参加し、トロツキー派文献の中文訳等の活動をした。九月には、中山大学生の張芳、施叔雲、陳逸謀、宋逢春、蕭洋水らが帰国し、中国でトロツキー派形成の初歩的基盤を築くことになる。同年冬、モスクワの中国人留学生の中でトロツキー派は大きく発展した。最高学府のレーニン学院から中山大学に至るまでトロツキー派がいる状況になっており、中山大学では全学生四百余名中、

蔣経国等のシンパを含めれば一四〇～一五〇人はいたとされる。年末、全ソ連の中国人トロツキー派は二百余人であったが、それからさらに発展し、全中国人留ソ学生の約半数に当たる五百余人に達したとされる。王明ら学校党部は早くから警戒していたが、これら潜行し、飛躍的発展を示すトロツキー派勢力の状況を全く知らなかった。[5]

かくして、ソ連の状況が中国に波及した形で、中国内で初のトロツキー派組織である「我們的話」派が形成されることになる。主要人物は中山大学留学生で、梁幹喬以外はモスクワで中国共産主義青年団に加入していたが、実際闘争の経験は不足していたといわれる。彼らは二七、八年に前後してソ連トロツキー派の秘密組織に加入した。そして、二八年冬、帰国途中、梁幹喬、区芳、張特、王子平、史唐、陸一淵らはシベリア鉄道の列車内で反対派会議を開催し、中国トロツキー派組織を設立することを決定した。かくして、二九年一月「我們的話」派は上海租界で三日間、創立大会として第一次代表大会を開催したのである。その構成は〈中央総書記〉施叔雲、〈中央宣伝部長〉陸一淵、〈中央組織部長〉張特、〈江浙区書記〉徐正菴、〈南方区書記〉梁幹喬、〈南方区組織部長〉陳逸謀、〈南方区宣伝部長〉区芳、〈北方区書記〉宋逢春、〈北方区宣伝部長〉蕭洋冰、〈北方区組織部長〉李梅五であった。中心任務はスターリンと中共中央の日和見主義的指導への反対であり、スローガンは①中共中央に反対派問題の公開討論を要求する、②中共中央委員会の改選、③中共中央はコミンテルンに中国問題に関する公開討論を要求せよ、④トロツキー指導の回復であった。[6] この時は中共と別組織を創る意図はなく、党内派閥として中共中央の変革を目指した。なお、大会には一般民衆の参加はなかった。

「我們的話」派の最高機関は総幹事会であり、その下に「江浙」「南方」「北方」の三区に分けた。主要に上海、香港、広東の三区に分かれて活動し、特に労働運動を重視した。上海では史唐と陸一淵が知識分子と労働者を結びつけ、香港では区芳と陳逸謀が自ら埠頭で労働者となり、労働階級との関係を作っていった。特に区芳は一年足らずで三百人の労働者を組織している。[7] 王文元（凡西）によれば、二九年九月の第二次代表大会時期には全中国に五百人のメンバーがおり、上海、香港、広州、武漢、蘇州、ハルピンの各大都市に分かれて活動していたという。[8] これは誇張している可能性もあるが、一

応順調な発展を示していたと見なせよう。ただ、問題は思想の純粋性を保つという理由からか「我們的話」派は閉鎖主義的傾向が強く、帰国留学生のある部分は中共幹部とは相いれなかったため、「我們的話」派と交渉するが、拒絶されたという。かくして、当初発展しながらも自ら枠を狭めていくことになる。

ところで、中国内でもトロツキー派生成の別の大きな流れが存在した。周知の通り、スターリンは、陳独秀らに革命失敗の全責任を負わせたが、そのことは中共内に強い不信感を残した。二七年八七会議で、瞿秋白は、陳が右翼日和見主義の政策を実施し、中共の独立を放棄し、革命的大衆を無視したと批判し、臨時中央政治局を樹立した。ただ、八月陳は上海に行った後も、中共中央の職務を離れておらず、中央の方も多くの問題を相談した。しかし、九月秋収蜂起と繰り返される暴動を見て、陳は暴動の必要性を認めながらも、それだけでは無意味であり、経済闘争を重視することで広範な大衆を動かせると主張した。[9] さらに、一二月広州蜂起の時、中共中央に①香港の帝国主義との武装衝突を極力避ける、②国民党左派、及び譚平山の第三党と連絡をとる必要を力説した。中共中央は①については相談の姿勢を見せたが、②は日和見主義として退けた。[10] では、何故陳は譚平山に固執するのか。譚は二七年一〇月中共を除名されたが、理由は「国共合作の際、至るところで国民党に従い」、馬日事変後、「公然と農政部長の資格で農民運動をゆき過ぎとして退けた」であった。[11] すなわち、第一次国共合作期、陳と同一歩調をとり、除名理由も陳と同一であった。譚の除名により中共からの脱党者は三千余人にも達した。一二月鄧演達らが第三党を結成するが、例えば、章伯鈞が第三党に合流した外、韓麟符、呉明（賀龍の秘書長）、彭沢民（中共党員で、国民党中委、中央海外部長）、林祖烈、及びこの時、複数の資料で傍証できないが、葉挺、葉剣英も加入したとされる。[12] 上層部のみならず、各省幹部にも動揺が広がり、江西の李小青、広東の王一龍、山東の王模らも中共を脱党して第三党に加入した。陳からみれば、同様な批判を受け、かつ大きな影響力を持った譚平山、第三党との関係をつけたいと考えるのは当然であった。

このように、陳が発言を強めるに及んで、中共中央も態度を硬化させた。特に、二八年六、七月モスクワで中共六全大

会が開催され、瞿秋白が「極左冒険主義」として退けられると、李立三が実権を握った。その政治決議では、中国未統一の「半植民地」で「半封建」社会とする見方が初歩的、かつ間接的ではあるが示され、それ故、中国革命の現段階は「ブルジョア民権革命」であり、中心任務は帝国主義打倒、土地革命であるが、民族資本家、小資産階級上層が革命を裏切った現在では、その原動力はプロレタリアと農民で、ソビエトを樹立すべきとした。[13] 六全大会後、陳はまだ党籍は剝奪されていなかったが、より厳しい状況に追い込まれ、毎月三〇元の生活費が与えられるだけで、いかなる仕事もさせられなかった。[14] この頃、陳、彭述之、鄭超麟、馬玉夫らは中共内に秘密組織を成立させ、中共中央と対決する姿勢を示した。彼らは自らを一つの中央機関と見なして各省、各区の中共党部に分かれて活動し始めた。[15] この時すでに「我們的話」派は設立されていたが、陳はそのことを知らなかった。五月尹寛から同派出版のトロツキー著の中国革命関係の文献を渡され、同年秋には、トロツキーの主張する「国民党政権はブルジョア政権」、中国では資本主義が「支配的」との見解を基本的に受け入れたという。[16]

二九年八月中東鉄道(東清鉄道、「東支鉄道」)を巡る中ソ間の武力衝突が発生した。中東鉄道はスターリンが軍事的、経済的観点から利用権に固執した帝政ロシア以来の不平等な権益であった。形式的には中ソ共同管理であったが、ソ連が利用権を独占していた。これを不服とする国民政府が、東北における反日の反帝保路運動の矛先をソ連に転じ、その独占破棄、「赤化宣伝防止」「主権回収」を掲げて強制接収を命じたのである。これに対し、中共は「ソ連への進攻戦争阻止」を打ち出した。陳は中国人の民族感情を考慮し、まず国民党の「民族的利益」擁護の仮面を打ち砕く必要があり、「ソ連擁護」だけでは最も目覚めたプロレタリア分子に受け入れられるだけで、広範な大衆を動員できない。中東鉄道を中ソ共同管理に戻すことを別にすれば、日米帝国主義の中東鉄道を巡る競争は日増しに激化する。しかも、帝国主義国間の戦争がソ連進攻戦争と同様に重大なものになっている、[17] と主張した。だが、中共中央は帝国主義によるソ連進攻戦争が主な危険と断じ、蔡和森も陳が「資産階級の国家主義と愛国主義の観点に立っており、絶対に社会主義の無産階級の観点とは相反する」

とし、陳のいう国民党「誤国政策反対」は自己の階級のスローガン、[18]と非難した。結局、一二月ソ連との戦闘に破れた張学良が国民政府の反対を顧みず、ソ連の条件を全面的に受け入れ、ハバロフスク会議議定書に調印、「衝突以前の状態」に戻すことで決着がついた。[19]

この意見対立も絡まり、二九年一一月中共中央は「取消派」として陳独秀、彭述之、蔡振徳、高語罕、劉仁静、馬玉夫、鄭超麟、陳碧蘭らの党籍を一斉に剥奪した。一二月一〇日陳はこれに反発し、「全党同志に告げる書」を発表した。その中で、我党創設以来、スターリンらの「日和見主義的政策を忠実に実行し、中国革命を恥ずべき悲惨な敗北に遭遇させた」と自己批判し、その後、国共合作、国民党からの脱退問題を、二・七惨案、五・三〇運動、中山艦事件、馬日事変を絡め、具体的に陳がいかに対応しようとし、それがスターリン、コミンテルンにどのように押しつぶされたかを論じる。そして、当面の反革命全盛期、「武装暴動」や「ソビエト樹立」の条件は客観的に成熟していず、「ソビエト樹立」は当面は教育宣伝のスローガンにすぎないと、中共の政策に真っ向から反対し、最後にトロツキーの主張は「マルクス・レーニン主義」と、その支持を明白にした。[20]

さらに、一二月一五日陳独秀、彭述之、蔡振徳、鄭超麟、尹寛、江常師、何資深、馬玉夫、陳碧蘭、羅世璠ら八一人連名で、『我們的政治意見書』を発表した。それを要約すると、(1)中国国民党は三民主義の政綱上、実業建設計画上、上層分子の成分上、ブルジョア政党である。長期合作の結果、その反革命性を覆い隠し、大量虐殺を招いた。(2)帝国主義の圧迫は階級連合を促進したり、階級闘争を緩和するものではない。だが、国民党は抽象的な「国民革命」のスローガンにより労農大衆に麻酔をかけ、自己の独立武装を組織させなかった。(3)馬日事変後、国民党資産階級の民主革命参加の歴史は終わりを告げ、社会主義革命段階へと歩み始めた。(4)資本主義は都市を占領したのみならず、郷村に深く入り、土地はすでに個人の私有資本で、地主は資本家した。ブルジョアジーは政治上、二回の革命（辛亥革命と「一九二五～二七年革命」）を経て政権を掌握した。(5)ブルジョア民主革命の任務は、プロレタリアが都市、郷村の貧民を指導して政権を獲得し、初め

て徹底的に完成できる。(6)革命情勢にない現段階には、平等、直接、普通無記名投票で生み出した徹底的に民主的な国民会議をかち取り、同時に「八時間労働制」「土地没収」「民族独立」を提起し、過渡期の四つの不可分の民主要求とする。かくして、広範な労働大衆を公開の現実的政治闘争に参加させ、徹底的なブルジョア民主主義を要求することからプロレタリア民主主義、すなわちソビエト政権へと歩む。(7)官僚集中制を民主集中制に代え、討論と批評の自由を実施する。一切の政治的自覚分子は中共党内から官僚集中制を打倒せよ。最後に①トロツキーの指導回復、②中共中央に除名された同志の党籍回復、④ソ連共産党、コミンテルン、及び各国支部の指導機関の改組等を建議した。[21] このように、国民党は「ブルジョア政党」、中国は「資本主義社会」であり、それ故、社会主義革命段階にあるが、革命情勢にない過渡期においては国民会議等の民主要求の徹底によって労農を糾合、訓練し、革命を準備するとした。このことは中国を「半植民地半封建社会」と規定し、ブルジョア革命段階としながらも、農村ソビエト樹立を最優先する中共との間に鋭い対立を誘発することになる。

① 淡翁「莫斯科中山大学外史」『現代史料』第四集、一九三五年五月、一八七～一八八頁。王凡西（王文元）『双山回憶録』周記行、一九七七年、五三～五四頁（矢吹晋訳『中国トロツキスト回憶録』柘植書房、一九七九年、四九～五〇頁）等。

② 曹仲彬、戴茂林『莫斯科中山大学与王明』黒龍江人民出版社、一九八八年、七〇～七三、七七頁。

③④ 同前、一一三～一一九頁。

⑤ 王凡西、前掲書、九二、一三八頁（邦訳八一～八二、一二〇～一二一頁）等。

⑥ 王健民『中国共産党史稿』第二編、中文図書供応社、一九七四年、一一九～一二〇頁。

⑦ 労他「追悼我們的死者――区芳同志」『火花』一巻六期、一九三一年一一月三〇日。

⑧ 王凡西、前掲書、一五三頁（邦訳一三四頁）等。

⑨ 「陳独秀来信」一九二七年一一月、中央檔案館『中共中央文件選集』第三冊、一九八九年、五五四～五五五頁。

⑩ 仿魯「清算陳独秀」、陳東晞編『陳独秀評論』北平東亜書局、一九三三年、七五頁。

⑪⑫ 龍門書店編『中国共産党発起人分裂史料』一九六八年、五八～五九頁。菊池貫晴『中国第三勢力史論』汲古書院、一九八七年、七五頁。

⑬ 「政治決議案」一九二八年七月、『中共中央文件選集』第四冊、一九八九年、二九六、二九八～三〇〇、三四〇頁等。

⑭ 中国国民党組織部調査科編『中国共産党之透視』一九三五年二月、一二八頁。

⑮ 前掲『中国共産党発起人分裂史料』、六三頁。
⑯ 唐宝林「試論陳独秀与托派的関係」『歴史研究』一九八一年六期。
⑰ 「陳独秀の中共中央常務委員会宛第二信」一九二九年八月一一日、日本国際問題研究所編『中国共産党史資料集』第四巻、一九七二年、四四七、四五〇頁等。
⑱ 蔡和森「論陳独秀主義」『布爾塞維克』四巻五期、一九三一年九月一〇日、五九頁。
⑲ 饒良倫等（古厩忠夫訳）「中東鉄道事件の原因と結果」、新潟大学『東アジア』二号、一九九三年。
⑳ 陳独秀「全党同志に告げる書」『中国共産党史資料集』第四巻、五三二～五四〇、五四二、五四四頁。
㉑ 『我們的政治意見書』一九二九年一二月一五日。

二　中国トロツキー各派の成立

一九二九年一二月上海に、第二番目の中国トロツキー派組織として無産者社が結成された。当初、僅か三〇数人で、大半は陳独秀総書記時代の中共幹部であった。『我們的政治意見書』で、コミンテルンにトロツキーの党籍回復等を要求した結果、波多野乾一によれば、期待通り海外のトロツキー派から資金が来るようになった。ドイツ社会民主党とも連絡がとれ、俄然景気がよくなったので「中共反対派中央」（無産者社）を組織したという。[1] 無産者社中央の構成は以下の通り。総書記兼政治局主席団主席は陳独秀、常任委員（以下、常委）兼宣伝部長は彭述之、常委兼組織部長は高語罕、常委兼北方・満州総責任は潘問友、常委兼農民部長は李季、常委兼特務部長劉仁静、常委兼青年部長王独清、常委兼軍事部長張振亜、常委兼秘書長の蔡振徳は工人部長、江蘇省書記も兼任した。[2] 無産者社設立による中共の党内危機も厳しかった。中央から各省委、党から青年団、さらに大衆団体に至るまで同調者が現れた。中共はそれに対処するため、系統的にパージ運動を行い、個別、集団の除名を実施した。中共中央に不満を持つが、国民党にまでは妥協できない者が次々と無産者社に加入した。とりわけ、第三党、改組派を経由しての加入者が多かったらしい。三〇年五月上海だけで加入者は三百余人に上った。なお、馬玉夫は元中共江蘇省委の労働運動指導幹部であり、以前の人脈を利用し、新聞社や絹織物工場の工会支部を掌握した外、鉄道、電車、建築等の多くの労働者を獲得した。その数は僅か二カ月弱で七〇～八〇人に及んだという。ま

た、神州国光社等の書店、出版社、印刷工場とも関係がつき、組織的活動し、法南では知識分子の中で活動した。北平でも任曙、江常師の関係で十数人を獲得した。それ故、陳独秀は「三年後、全党、我に帰す」と豪語した。[3] かくして省党部も江蘇、湖北、湖南、広東、広西、山東、福建、河南、満州北部等に組織され、その勢いは一つの新たな「共産党」ともいえるほどであったという。[4] このように、無産者社は誕生するとすぐに、比較的優位な経済条件を有し、活動力は強く、活動範囲も広かった。「我們的話」派の沈黙主義に対し、無産者社は積極的に政治宣言を発表、中共中央を批判、国民会議等の主張を繰り広げ、かつ陳の著名さ、政治能力もあり、「我們的話」派を抜きさり、一挙に中国トロツキー派の代表的地位に立った。どこまで達成されたか不明点も残るが、組織は〈中央〉—〈省委〉—〈県委〉—〈区委〉—〈支部〉等の垂直系統にしようとしていた。市委は省委の下に置かれた。時には、指導効果を強めるために直属単位を縮小し、幾つかの特別委員会を設けて数県の党務を管理させた。ただ、全体人数が少なかったために、場所によっては一省委に数省の党務を兼務させている。[5]

問題は幹部間の対立である。彭述之は陳を「日和見主義者」「英米民主派」等と非難し、また、陳に次ぐ地位を巡って彭、鄭超麟、尹寛の争いがあり、また理論派と実践派の間に鋭い対立が続いていた。上海の幾つかの工場で実際工作をしていた「四大金剛」(馬玉夫、羅世璠、蔡振徳、薛農山)は陳周囲の理論家、例えば彭述之、鄭超麟、尹寛らを見下し、「これら本の虫が百編の文章を書こうとも、我々が工場で一つの支部を行う力量に及ばない」、と批判した。[6] このように、双方の意義を認め合う形態にはほど遠かった。

三〇年三月機関誌『無産者』が創刊された。「宣言」によれば、使命は「中国無産階級の先進分子を集め、国際ボルシェビキ・レーニン派(反対派)の指導下で、現在のコミンテルン、及び中共指導機関の日和見主義路線、盲動主義策略、官僚主義党制を徹底的に掃除し、改めてマルクス・レーニン主義理論という武器で中国無産階級を武装することにある」、と。[7] また同誌で、羅世璠は、中共江蘇省委員李維漢の労農運動が発展しているとする総括に激しく反発、江蘇省の実際状況を

示せば論破できるとし、①上海では、四・一二クーデタ後、罷工運動は停止していないが、闘争範囲は非常に狭い。②滬東区委は大産業区域に十の支部もなく、経常的に会議を開いているのは五つの支部もない。③大多数の県は都市工作をせず、ほとんど農民党になっている。④江陰、無錫県等の農民運動は盲動主義の影響を受け、今なお組織を回復できない。⑤党はすでに無頼、土匪、富農、学生の上に建設されている。⑥革命闘争は日々郷村、山岳に走り、革命情勢は復興したと見なしている[8]、と非難する。また、陳独秀はいう、現在、反乱兵士、土匪、「神兵」（紅燈教）、回民、紅槍会、大刀会等を加えて組織された「紅軍」が日増しに発展し、これら「紅軍」が農民遊撃戦争を指導し、大都市に影響を与え、新たな革命の高まりを生みだし、土地革命を完成し、ソビエト政権を樹立するという。これを、いわゆる「中国的特徴」とするが、「郷村が都市を指導する」「ルンペン・プロレタリアが労働者を指導する」という政策を、「マルクス・レーニン主義」の反対派には全く理解できない[9]、と。

李立三はこれらの主張を意識し、反論を加える。三〇年四月李は「全国的規模での革命の新たな高潮が日々近づきつつある」との認識の下、軍閥混戦の拡大と深化は「一省または数省での政権奪取」に有利な条件と見なした。そして都市を重視し、プロレタリアの闘争が勝敗を決する力であり、毛沢東らの推進する「農村による都市包囲」は幻想という点ではトロツキー派と一致する。だが、同時にプロレタリア闘争の高まりを農民暴動、兵士反乱、紅軍の進攻と配合しなければ、革命の勝利はないとし、トロツキー派の農民軽視、「紅軍不要」の思想は同盟軍を排除する反動思想と非難した[10]。

三〇年一月、十月社が三番目の組織として成立した。劉仁静はレーニン学院留学後、帰国途上、独仏のトロツキー組織を訪問、さらにトルキスタンでトロツキー本人に会い、レーニンをもじった「列爾士」というペンネームをもらった。このように、劉は他の留学生と異なり、直接トロツキーから中国トロツキー派を発展させる委託を受け、かつトロツキー起草の「中国反対派綱領」（未見）を持って帰国した。かくして上海に帰国した時、極めて尊大な態度をとったらしい。まず「我們的話」派と何回か交渉したが、埒があかず、劉は転じて無産者社の陳独秀と交渉した。この結果、前述の如く常委

兼特務部長に選ばれたのだが、「中国のトロツキー」を自認する劉は総書記に就任するつもりでいたらしく、憤慨のあまり身近にいた幾人かを集め、十月社を結成した。当初、劉、王文元、段子亮ら僅かに九人であった。機関誌は『十月』である。[11] ただ、劉は一貫して傲慢で、十月社内部でも問題が発生し、結局、『十月』を二号出しただけで混乱に陥り、代って王文元が宣伝、宋逢春が組織を担当することとなった。ところで、劉は、蔣介石が飛行機、爆弾等の数多くの新式武器で武装した三〇～四〇万の軍隊で江西ソビエト区に攻め込んだが、僅かな銃器で武装した農民遊撃隊に勝利できないことに驚きを隠さない。だが、「農民戦争が極めて英雄的としても都市の労働運動に影響を与えられるだけで、労働運動に代替できない。資産階級に反対し、国民党打倒の決定的闘争は主要に都市で進めねばならない」[12]と、結局のところ従来の労働運動と都市重視の理論に戻るのである。

三〇年一二月東方大学からの帰国留学生趙済、劉胤、王平一が四番目の組織として戦闘社を結成した。彼らは長期間、中共党員であったらしいが、モスクワでトロツキー派に転じ、その理論に通じ、かつ実践活動の経験もした。彼らは帰国後、まず「我們的話」派と交渉し、その際、同派の政治上の短見と工作上の誤りを批判し、政治、組織両面で数多く建議したため、拒絶された。その後、陳独秀、彭述之らに接近したが、完全決裂し、そこで独自に戦闘社を組織したのである。活動したのは「四大巨頭」（趙済、劉胤、王平一、徐乃達）を中心に朱逸民、閻永昌ら数人であった。[13] 機関誌は『戦闘』で、大部分はトロツキーの文章の翻訳であった。彼らによれば、無産者社は「老日和見主義者の一群」、「我們的話」派は「理論も実践もない群民」、十月社は「空理空論の理論家の一群」で、中国革命は戦闘社の『四大巨頭』だけが指導できる、[14] と主張した。しかし、その発展は緩慢で、統一大会時期ですら三〇人もいず、社会的影響力も弱かった。

このように、各派は激しい対立を示した。石頭によれば、主要因は「我們的話」派の「モンロー主義」にあるとし、「幾編かのトロツキーの文章を翻訳するだけで、政治活動はしない」とし、指導者達が「年若い青年団員」で、ソ連で幾らかマルクス・レーニン主義理論を学んだが、実際経験がないと断じる。彼らは、陳独秀を「老日和見主義者」、戦闘社を「大

衆の力を信じない」、宋逢春を「真の（革命）取消派」と他三派を非難したが、他三派も「我們的話」派の「革命の高まりがまさに到来する兆候がある」との見方を、中共中央に投降を乞うものと見なし、反対派中のスターリン主義者として一斉に批判した。[15] こうした対立と共に深刻であったのが資金問題である。前述の通り、無産者社は設立当初、トロツキー自身やドイツ社会民主党等から資金援助があったが、亡命中のトロツキーから資金が続くわけもなく、すぐに窮迫した状態に陥った。トロツキー派の労働者からの献金はあったと考えられるが、それ以外の献金を出す団体、個人もなく、陳や彭述之の名声から文筆業、翻訳等で資金を得て、生活費を節約し、組織維持の資金を捻出していた。[16] 他三派の経済状況はさらに厳しく、やはり幾人かの原稿料に依拠して生活していたが、油印の機関誌さえ遅延する有り様であった。

① 波多野乾一編『資料集成中国共産党史』第二巻、時事通信社、一九六一年、一一七～一一八頁。
② 仿魯、前掲史料、七八～七九頁。
③ 「取消派的形成」『現代史料』第一集（再版）一九三五年、二四一～二四二頁。明遠「取消派的形成及其没落」、同第二集、一九三四年、三七五頁。『鄭超麟回憶録』現代史料編刊社、一九八六年、二八四、二八八、三〇一頁。
④ 仿魯、前掲史料、七九頁。
⑤ 劉珊「共党取消派的過去」『現代史料』第二集、三九一～三九二頁。
⑥ 濮清泉（濮徳治）「中国托派的産生和滅亡」『文史資料』七一輯、八五～八六頁。以下、濮徳治①と略称。
⑦ 「本報発刊宣言」『無産者』一期、一九三〇年三月。
⑧ 羅世璠「江蘇全省第二次代表大会!?」『無産者』一期。
⑨ 陳独秀「関於所謂『紅軍』問題」一九三〇年四月、『無産者』二期、一九三〇年七月。
⑩ 李立三「一省または数省での政権奪取の勝利をどのように準備するか」一九三〇年四月二日、『中国共産党史資料集』第四巻、五九五～五九七頁。
⑪ 明遠、前掲史料、三七六～三七七頁。
⑫ 列爾士（劉仁静）「江西的〝剿赤〟戦争」『伊斯克拉』一巻一期、一九三一年九月。
⑬⑭ 濮清泉「我所知道的陳独秀」『文史資料』七一輯、三八頁、以下、濮徳治②と略称。明遠、前掲史料、三七八～三八〇頁。濮徳治①、八九頁。
⑮ 石頭「取消派統一大会追記」『現代史料』第三集、一九三四年、二一四、二一六頁。
⑯ 前掲「取消派的形成」、二四二頁。王凡西、前掲書、一三六頁（邦訳、一一九頁）。

三　中国トロツキー各派の統一への動向

一九三〇年九月、中国トロツキー各派は上海で第二次大会（第一次大会は不明）を開催したが、小党派が分裂、対立し、成果なく解散した。このように統一の動きはあったが、本格的に統一する意思はなく、各々が自己主張するだけで、ほとんど進展しなかった。当時、無産者社、「我們的話」派、十月社を中心に十余派に分かれ、多くは約百人、少ないものは十数人、甚だしきは二、三人で一派をなしていた。[1] この時、トロツキー自身から陳独秀、劉仁静、「我們的話」派へ各派間には政綱、戦略上、根本的な差異はなく、「統一は必要」と力説した返信が届いた。また、農民戦争と労働運動との連繋が最も重要としながらも、「農民暴動の中に溶化」してはならないと、労働者重視の姿勢を強調している。[2] トロツキーは、ソビエトとは労働者の権力機関で、農民は独力でソビエトを創設できず、プロレタリアによる重要工業と政治中心の統治が農村での紅軍組織化、ソビエト樹立の前提となると考えていたのである。[3] 結局、トロツキーからは三回の返信が来て、全て「速やかに統一せよ」と書かれていた。特に三回目の返信（三一年一月）では具体的に段取りが示され、①直ちに統一を進め、統一大会を召集する、②大会代表は組織を単位とせずに人数比によって推挙する、③統一大会以前、協議委員会を組織し、委員は各派一人を推挙し、各種議案の起草、宣言に責任を負わせる、[4] となっていた。最も統一に熱心であったのは陳独秀らであった。陳は「統一しなければ、他三派にとって前途がないだけでなく、無産者社も必ず滅びる」と考え、何度も合作を表明し、「既存の組織」（無産者社）への参加を望んだが、厳しく拒絶された。そこで、陳は前述の公開書簡でトロツキーに訴えた。トロツキーは喜び、統一を強く勧告した。このことは当然、陳を支援する結果となり、状況は大転換を見せた。トロツキー派を自認する以上、本人からの勧告を無視できず、三派は止むなく同意したのである。[5] のみならず、その背景には、中山大学で「トロツキー派」留学生弾圧の経験のある王明ら留ソ派が、三一年一月中共中央委員会第三回総会で李立三を批判して登場したことは、間接的に統一を促進したものと考えられる。その上、周知の通り王

明らはいわゆる「中間階級主要打撃論」を主張した。このことは、中共とトロツキー派、第三勢力との間で和解不可能な対立を生み出さずにはおかなかった。

こうした情勢の変化を受けて、無産者社の単独作成と考えられるが、三一年一月「中国共産主義左派反対派（ボルシェビキ・レーニン派）綱領」が出され、各派の統一が目指された。その概略は以下の通り。まず、この時期を第三次革命への過渡期と位置づける。〈中国革命失敗の教訓〉①スターリンが国民党の資産階級の性格を隠蔽した結果、プロレタリアが最も緊急な問題に直面した際、自らの政党がなかった。②民族資産階級は国際帝国主義の軍事力量の後援となった。③プロレタリアは都市と農村の無数の小資産階級と革命的連盟をもたねばならない。コミンテルンのいう小資産階級はその上層分子、主に知識分子で、民主政党、団体の名義で都市、郷村の貧民を利用し、大資産階級に売り渡した。④ソビエトは広範な革命の高まりの時、組織する。〈「共産党」の策略〉「共産党」は改めて第三次革命の準備を開始する。当面の具体的任務は、ある部分の労働者の経済・政治闘争を指導し、「共産党」指導下に真の大衆的階級工会を創設する。そして、党の秘密組織を強固にし、同時に一切の公開工作の可能性を利用して党の影響力を拡張する。農民の減租、抗捐、反高利貸闘争を指導し、貧農を団結させ、党の農村支部を設立する。これらは将来の武装暴動により政権を奪取する道である。軍事独裁と国民党訓政への反対は必然的に過渡期の革命的民主要求の形式を採る。〈中国革命の前途〉第三次中国革命の勝利はプロレタリア独裁である。〈反対派当面の任務〉①統一左派反対派は堅強な一つの集中指導の反対派小組織を創設する。②「中間左派」の理論、政治の機関報を発行する。③主要産業区域の重要産業内に改めて党の核心を建設する。そして、最後に「左派反対派は決して第二党、あるいは（第三インター・コミンテルンに対抗する）『第四インターナショナル』の組織化を企図するものではない」と明言した。[6] 以上のように、民族資本家、知識分子を批判し、労農運動組織化を重視するが、武装暴動による政権奪取は「将来」のこととする。ただ、この時点でも「第二党」を創る意思はなく、中共への復帰をあきらめてはおらず、「共産党」（中共）として策略を論じる形式を採り、かつ注目すべきは自らを中共より右寄りの

「中間左派」と位置づけていることであろう。

かくして四派は「休戦」し、統一大会準備のための協議委員会を設立した。委員には「我們的話」派は区芳、陳逸謀、無産者社は馬玉夫、呉季厳、十月社は王文元、宋逢春、戦闘社は王平一、趙済の計八人が就任した。陳独秀は別格で、列席して意見を出した。協議委員会下には各派人数調査委員会、各項決議起草委員会、代表資格審査委員会等があった。起草委員会は、陳独秀が政治決議草案、尹寛が職工運動決議草案、王平一が土地問題決議草案、王文元が大会宣言というように、責任分担を決定した。[7]

とはいえ、各派内での調整がスムーズにいったわけではない。例えば、無産者社ですら意見調整に手間どっている。三一年二月常委「第六号通告——反対派統一的問題」が各支部に向けて出された。内容は、①各派反対派は統一すべきである。②共同綱領、政治・組織決議案等の理論問題は真剣に討論する。③各派人数の精査は事実上不可能で、各派は口頭で詳細な報告をすべきである。④彼らも小組織であることを認めないならば、根本的に統一問題を論じられないし、もし無産者社を中心としようとすれば、統一を阻害するであろう。そして「執行委員会の統一に対する態度に不満な者があれば、その意見を刊行物上で発表し、討論を要求できる」、とした。なお、これには但し書きがあり、通告は常委五人中、彭述之を除く四人が完全に同意している、[8]と。このように、スターリン式の官僚体制への反発から常委内部の状況を必要以上に暴露し、神経質なまでに民主的に運営しようとしていた。にもかかわらず、すぐに幾つかの質問状が届いた。学生支部書記王仁からの質問状は以下の通り。支部会で彭道之（述之の弟）が、「第六号通告」は①尹寛個人の意見、②尹寛は統一に対して下層の批評を許さない、③本来、馬玉夫提起の「無産者社を中心とする」に皆同意していたと主張したという。以上に対して、王仁らは通告を常委の決議案と認めながらも、釈明を求めた。これに対し、常委は、この結論は陳独秀が作成したもので、全体一致で賛成しており、通告も陳の起草による。彭述之を除く、陳、尹寛、馬玉夫、羅世璠が署名し、採択したのであるから、当然、常委名義で発布できるとした。[9]

だが、この問題は三月になっても決着がつかず、今度は常委の一人羅世璠が公開書簡を明らかにした。「最近、統一問題に関しては『烏烟瘴気』（事態が混乱して暗黒の状態）であると言える。……この問題は再び集団討論する必要があると考える。さもないと、述之、尹寛個人の傾向が収拾のつかない状態に発展し、革命を絞殺してしまう」、と。これに対し、尹寛は釈明した。すなわち、最初、我々の「統一」に対する感情はあまりよくなかった。内部を団結させ、一致して外に当たるのに「中心」があり、「大衆」はいるのか。この時、私が上層統一を主張し、完全に大衆の意見を抹殺したと批判された。馬玉夫は「無産者社を中心として反対派を指導すべきで、（それ故）しばらくは統一しない」と結論づけたが、それでは統一できなくなると考えた。また、私は(1)官僚主義の影響による単純な組織力量の過信、(2)「実際派」は経験のみを重視し、全ての知識分子を白眼視し、一切の問題の複雑性を軽視し、さらに下層から上層に反対することで一種の無政府主義的傾向を創りだしたと批判した。この種の傾向がプロレタリア政党の民主集中制の最大の妨害と考えたからという。最後に、尹寛は、陳独秀を「唯一の指導者」と認めるとともに、陳の支持を期待したのである。[10]

統一大会代表数を巡る各派間対立も激しさを増した。無産者社は各派人数に比例して代表を出すことを主張し、他三派は派別に同数を出すことを主張した。この論争は数カ月続き、結局、陳独秀が「派別と人数を互いに結びつける」という折衷案を示し、妥協が成立した。当時、各派人数は以下の通り、①無産者社は上海中心に香港や華北での新参者を加えて約百人。この数を見る限り、成立当初、大量の加入者があったが、その後、辞めた人々も多く、流動化し続けていたことを示している。②「我們的話」派は香港七〇～八〇人、上海二〇～三〇人で計九〇～一一〇人。だが、梁幹喬は「三百余」と主張、秘密工作の原則を盾に名簿提出も拒絶。結局、「一二〇～一四〇」で妥協した。③十月社は上海の三〇人に、華北の五〇人を加えて計八〇人と推定した。④戦闘社は全て上海におり、三〇余人。ただ、実際は各派の人数比が重視されたようで、代表は二〇人に約一人選出され、無産者社五人、「我們的話」派が七人、十月社四人、戦闘社二人となった。[11]

この代表選出を巡り混乱があった。無産者社では馬玉夫ら「四大金剛」が「尹寛打倒」「彭述之打倒」を強く主張した。

その後、彭述之と連合し、尹寛を打倒した。ただ、馬らも陳、彭嫡系の鄭超麟、江常師に倒されることになる。こうした状況下で蔡振徳、羅世琴は消極的になり、薛農山は次第に社会民主主義的となった。結局、別格の陳、及び彭、鄭超麟、何資深、江常師が代表となった。「我們的話」派は張特系三人、陳逸謀系四人の計七人が選ばれた。十月社は羅漢、宋逢春、王文元、濮徳治を代表とした。劉仁静は落選に怒り、十月社を辞め、単独活動に入った。戦闘社は大会当日やっと趙済を代表とした。ただ、戦闘社書記閔穎昌は不満で、十月社の段子亮、無産者社の「四大金剛」、及び「我們的話」派の区芳系と結び、下層統一を主張し、大会に対抗した。なお、統一大会には唐山の秘密組織が国民党に破壊され、連絡が途絶えてしまい、北方代表の参加なく、また蘇州、武漢、青島、及び四川等は小組があるだけで、参加できなかった。[12] 当時、各派の経済状況は異常なほど逼迫し、秘密会場を借入資金も難題であった。結局、各派が全費用を分担し、同時にトロツキー派内で特別献金を集め、かろうじて資金を捻出した。

かくして、三一年五月一日から二日に統一大会が上海の提籃橋付近で開催された。大会主席団は無産者社の陳独秀と鄭超麟、「我們的話」派の陳逸謀、十月社の王文元、戦闘社の王平一で構成された。一日目は、まず主席団主席陳独秀が政治報告を行い、午後の会議は鄭超麟に主席が代わり、政治決議案討論の段取りを述べた。問題は主要に三つであった。①国民会議問題――陳独秀はこの時、国民会議内での徹底的な民主化闘争を梃子に、国民会議の「ソビエト」への転換が可能との認識を表明した。②プロレタリア独裁問題――陳は、農民が絶対多数の中国では分かりやすい「国民党打倒」「政権は人民のもの」を提出できるだけとしたが、多数の代表は戦略目標を明白にする必要があるとして反発した。結局、陳が「プロレタリアと貧農の独裁」という妥協案を出し、同意にこぎつけた。③名称問題――陳は「中国共産主義同盟」を提起、他には「中共ボルシェビキ・レーニン派」「中国工人党」等も提起されたが、陳の意見が採択された。[13] だが、「中共左派反対派」の名称が使用され続け、「中国共産主義同盟」の名称が実際に使われるのは三六年初頭になってからである。ところで、統一により上海では四派の各小組を合併し、「滬東」「閘北・滬中」「滬西」「法南」の四区に再編した。また、

香港中心の「華南区委」は従来通り労働運動中心とした。さらに北平中心の「華北区委」は学校に重点を置いた。なぜなら北京、北京師範、燕京、中国各大学や各中学校にはすでにトロツキー派支部があり、「マルクス主義学習団」を組織したり、公開講演で「スターリン路線」や「半植民地半封建」理論に反駁を加えるなどの活動基盤があったからである。[14]

二日目の主席陳逸謀の開会宣言の時に、江常師が密偵の発見を伝えた。そこで、彭述之が緊急に中央委員選挙の繰り上げを提起した。陳独秀の主張で「無記名自由選挙」が行われ、無産者社の陳独秀、彭述之、鄭超麟、「我們的話」派の陳逸謀、区芳、十月社の王文元、宋逢春、羅漢、濮徳治の計九人が選出された。戦闘社は当選者がなく、かつ劉仁静も落選したことを受けて、羅漢、濮徳治は大局を考慮して趙済と劉仁静の補選を主張したが、陳独秀は選挙は合法として譲らなかった。中央委員会書記は陳独秀、常委五人は陳独秀、鄭超麟、王文元、宋逢春、陳逸謀、党報委員会は陳独秀、鄭超麟、彭述之、王文元、宋逢春で、両委員会とも陳独秀が推されて書記に就任した。また、組織工作は陳逸謀、濮徳治、宣伝工作は鄭超麟、彭述之が担当することとなった。[15] かくして陳独秀が圧倒的に勝利し、無産者社が中央委員会の大権を完全に掌中に収めた。このように、中国トロツキー派は一応の統一が完成し、これを基盤に本格的に活動を開始するはずであった。

① 王健民『中国共産党史稿』第二編、中文図書供応社（香港）、一九七四年、一二〇頁。なお、同書は「第二次大会」を「（民）一八年」とするが、この時は「我們的話」派しか存在せず、「一九年」の誤りと考えた。

② 「托洛斯基同志致〝我們的話派〟信」『無産者』九期、一九三一年一月。

③ 陳独秀輯「托洛斯基同志論蘇維埃」『火花』一巻七期、一九三二年一月二八日。

④ 石頭「取消派統一大会追記」『現代史料』第三集、一九三四年、二一七頁。

⑤ 王凡西、前掲書、一五七～一五九頁（邦訳一三七～一三八頁）等。

⑥ 「中国共産主義左派反対派（布爾塞維克列寧派）的綱領」『無産者』九期。

⑦ 王健民、前掲書、一二一頁。石頭、前掲史料、二一九頁。

⑧ 常委「第六号通告——反対派統一的問題」『無産者』一一期、一九三一年二月。

⑨ 常委「常委答覆閘北区委及学生支部的信」一九三一年三月六日、『無産者』一二期、一九三一年三月。同前一二期、三八頁。

⑩ 尹寛「〝烏煙瘴気〟――由何而来及怎様掃去」『無産者』一二期。
⑪ 王凡西、前掲書、六〇頁（邦訳、一三九頁）等。なお、文脈から「華北的『我們的話』」は「十月社」の誤植と考えた。
⑫ 石頭、前掲史料、二三二頁参照。
⑬ 前掲拙稿「『国民会議』を巡る政治力学」。濮徳治②、四二頁等。
⑭ 唐宝林、前掲書、一二九頁。
⑮ 濮徳治②、四二～四三頁。

四　中国トロツキー派への攻撃とその停滞

一九三一年五月二日統一大会が閉幕すると、中央委員になれなかった馬玉夫がすぐに国民党龍華司令部に密告した。その結果、陳独秀らは逃れたが、鄭超麟、王文元、宋逢春、陳逸謀、濮徳治ら一三人が逮捕された。いわば「第一次破壊」である。このことは中央委員九人中、五人の逮捕を意味し、国民党組織部は後に「事実上、反対派中央の精華の大部はすでに消滅した」[①]と総括している。梁幹喬は元々黄埔軍校卒であった関係から藍衣社幹部に、蔡振徳は「陝西某軍」の官になり、さらに北方総責任者潘問友は北平当局に自首した。当時、広東、広西、福建各省委は資金が枯渇し、亀裂が入り、河南省委も国民党に破壊された。そうした状況下で陳に忠実な者を除く大部分は中共に回帰し、また多くが南京国民政府に行き、自首した。[②]四分五裂の状況になったのである。結局、中央委員会には陳独秀、彭述之、羅漢三人が残るだけで、そこで呉季厳、劉仁静、張特（張も後に李宗仁、白崇禧に投降）等を中央委員会に引き入れ、挽回を期した。

これで国民党の攻撃は終わらず、八月「第二次破壊」が行われた。尹寛が陳独秀の命を受けて上海租界の振華旅館で会議を開催した。同夜、不参加の陳、彭らは逮捕を免れたが、中央委員の宋逢春、尹寛らを含む参加者全員が逮捕された。この後、陳、彭の半年の努力を経て臨時常任委員会（以下、臨時常委）を設立したが、混乱の原因を作る劉仁静と趙済らの参加を拒絶した。謝徳盤が常委秘書、羅世播が常委に就任した。このように、臨時常委は元無産者社構成員で占められたため、他派からの攻撃を免れえなかった。そこで、十月社の宋逢春、濮徳治が重病で保釈になった時、陳は書簡で再三、臨時常委への参加を要請し、彼らも参加することとなった。臨時常委は週に一回、会議を開催し、国民会議と組織回復の

問題を討論した。[3] ただ、工作は上海で多少行われただけだったようである。

だが、三一年九・一八事変が勃発すると、陳独秀は敏感に反応し、反日救国運動の中で「日貨排斥」と「対日宣戦」の二つは多数の民衆の意思と見なした。①植民地、落後国家の帝国主義への宣戦は一種の革命戦争で、必然的に民衆運動が台頭する。②国民党政府の軍隊だけでは不十分で、広範な武装民衆の持久的な決死戦が必要である。③「対日宣戦」をし、民族革命戦争に勝利しようとすれば、第三次革命を復興し、「革命的民衆政権」を反革命の国民党政権に代え、全国の革命民衆と兵士を指導する必要がある。そして、ソ連、及び全世界の無産階級、特に日本の無産階級、全世界の被圧迫民族、特に朝鮮民族の援助を受け、日本帝国主義と持久戦を行う。同時に、長期の「日貨排斥」によって日本資産階級に致命的打撃を与える、[4] と論じた。また、陳は「新たな革命の波は未だ到来していない。民主革命の任務が未完成なので、猛烈な徹底的民主運動（民族運動を包括）があってのみ、新たな革命の波を成長させることができる」と述べている。[5] つまり、陳は一貫して主張してきた民主主義概念に民族主義を包摂させると同時に、これ以降、対日戦争を「民族革命戦争」と見なし、抗日ナショナリズムを強く打ち出すようになる。

三二年一月一日臨時常委は「告全党同志書」を出し、全ての労働運動、学生運動、反日運動、国民会議闘争、反国民党闘争からソビエト運動に至るまで「一切の共産主義者は連合行動しよう」と呼びかけ、陳、彭、羅漢は中共中央に「合作抗日」を提案している。[6] だが、中共は、取消派「滬東区委」が九月三〇日に「労農学商兵は自発的に速やかに広範に『全国反日大同盟』を組織せよ！」と主張しているとし、取消派が五・三〇時代のいわゆる「民族統一戦線」と当時の労「商」学連合会を夢想している。取消派の言う「革命的民衆政府」「革命的国民会議」は当然、兵農労「商」各界の連合政府である。見よ！ 五・三〇時期「民族資産階級」が反革命であったということを。これは二五年、二七年の陳独秀の日和見主義の復活、[7] と見なした。これではトロツキー派との合作は実現するはずもなかった。また、この時点で中共は民族資本家を含む連合戦線に一顧だにしていない。

続いて三二年一月第一次上海事変が開始されると、三月三日トロツキー派は「為日軍占領淞滬告全国民衆」という檄文を出した。「上海における今回の反日戦争は失敗した！」。その原因は「単に軍事的なものではなく」、「国民党政府の一貫した不抵抗政策がもたらした」と総括し、「英雄的な抗日の十九路軍の兵士と下士官は……全上海から（全）中国に至る革命的民衆と密接に手を携えて合作してこそ、初めて終始不屈に奮戦できる」と宣言した。そして「上海の反日戦争はまさに開始されたばかりで……民衆が断固として反日反売国政府を最後まで貫きさえすれば、必然的に最後の勝利を獲得できる」と呼びかけた。[8] また、彭述之も十九路軍を評価する。ただし上層と下層を区分し、上層小資産階級の精神を代表する将領蔣光鼐、蔡廷鍇等は終始萎縮し、妥協的で、根本的には不抵抗主義を主張し、下層小資産階級の精神を代表する兵士大衆と下士官の主張は徹底抵抗である。日本帝国主義と徹底的闘争を行い、一切の帝国主義と革命的民族闘争を行うためには、一切の兵士と下士官が国民党売国政府を離脱し、民衆と合体し、無産階級の先鋒隊たる共産党の指導下で初めて可能になる。ところが、スターリン主義者は労働運動の中で絶えず日和見・盲動主義的政策を行い、他方で無自覚的に国民党政府の労働階級鎮圧を援助している、[9] と。そこで、トロツキー派の任務は①各地の労働者、農民、都市貧民の義勇軍運動を組織し、反日反国民党の旗の下に決起させ、同時に軍隊で分化運動を行い、国民党支配から離脱させ、反日反国民党義勇軍を成立させる。②全力で労働者の罷工運動を推進し、労働者ソビエトを組織する、③土地奪取と反帝反国民党の旗の下で農民武装闘争を発展させ、農民ソビエト区域を拡大する、④全人民代表の国民会議を開催し、全国規模で反日反国民党闘争を指導する、[10] とした。

中共中央の張聞天は以下のようにいう。取消派はこれを「左」の国民党軍閥指導下の反日戦争と規定し、国民党軍閥の一切の陰謀の暴露ではなく、革命兵士と民衆に連合を呼びかけ、「絶対に今回の反日戦争を擁護する」とし、主要工作として各学校から市区に至るまで緊急行動委員会を樹立し、①抗日義勇軍の編成、②募集、緊急徴発、及び奸商、売国奴から財産を強制没収し、義勇軍に軍費を供給するとした。その上、取消派は十九路軍軍官達を指導して抗日のみならず、反

蔣までさせようと考えている。そして、当面の唯一の任務として「小資産階級の党派、甚だしくは左旋回した自由資産階級の党派」、例えば第三党の類と連合し、蔣介石の国民政府を打倒し、蔣光鼐、蔡廷鍇の類の「中間統治形式」を打ち立て、それを徹底的な民族戦争、徹底的な民主政治制度の道を歩ませるとするのである、[11]と。つまり、トロツキー派が当時、十九路軍の抗戦を支持していたことは明白であり、そのことは張聞天の言からも傍証できる。その上、十九路軍に「反蔣」を期待したことも、福建人民革命政府での同軍の役割を見れば分かる通り、先見の明があったというべきであろう。上海を拠点とするトロツキー派は第一次上海事変と民衆の反日意識の盛り上がりを身近にみて、その歴史的意義を見抜くことができたのである。ところが、後に康生は以下のように総括した。「三二年当時、中国の最も主要な事件は上海戦争である。十九路軍と上海の労働者、市民は上海を防衛するために英雄的に抗日した。しかし、トロツキー匪徒……は異口同音に『上海戦争は民族革命戦争ではなく、帝国主義と帝国主義の戦争である』と言った」[12]と。つまり康生は、中共が当時十九路軍の抗日を評価したのに対し、トロツキー派は評価できず、破壊活動を行ったと、事実を逆転させたのである。

トロツキー派は、組織発展の活路を北方の学生運動と労働運動に見いだそうとした。すなわち、①北平は主要な学生地域であり、各学校でトロツキー派が核心的役割を果たすべきである。同時に学生を労農の中に行かせ、双方の運動を連携させ、特に学生を国民会議開催の闘争に向かうように鼓舞する。②北方の産業労働者は鉄道、鉱山、及び紡績労働者等であり、これが北方工作発展の唯一の基盤である、[13]とした。

このように、トロツキー派が組織強化を模索しながら、中共とも熾烈な論争を続けていた三二年一〇月一七日、陳独秀逮捕という決定的打撃が待ち受けていた。「第三次破壊」である。[14]上海公安局長文鴻恩が最高指揮を採り、上海共同租界、仏租界九カ所でトロツキー派壊滅作戦が執行された。丁度、病欠の陳を除く、彭述之、羅世璠、宋逢春、濮徳治が謝徳盤宅で週一回の常任委員会を開催しており、その全員が逮捕され、夕方には岳州路の住居で陳も逮捕された。結局、陳、彭述之、羅世璠、謝徳盤、王子平（曾孟）、何資深、彭道之、梁有光（以上、無産者社）、宋逢春、濮徳治（以上、十月社）、王平

一（戦闘社）等が逮捕され、最高幹部、突出した活動家が一網打尽とされたのである。[15] ところで、三一年六月向忠発の銃殺以降、ヌウラン夫妻（コミンテルン極東局秘書）、韓麟符等の逮捕が続き、陳の逮捕前には紅軍第十三軍長胡公冕も逮捕されている。[16] このことから類推するに、南京国民政府の弾圧はトロツキー派のみに向けられたものではなく、共産主義運動弾圧の一環であったとみなせる。

ともあれ陳独秀という著名な人物の逮捕は大きな反響を呼び起こした。この問題は重要である。なぜなら、陳の支持基盤とその対立する立場にアプローチできるからである。第一に、国民党寄りの『北方公論』は「政府が陳独秀を当面の中国共産党の首領とみなし、銃殺か無期懲役を判決するならば、それは国民党の勝利というより共産党の勝利」とし、中共中央の指導者達は「死ねばよい！」といっているとする。[17] 第二に、実際に中共系はどのように言っているのか。『大衆評論』は「かつて革命に参加し、後に革命に背いた政党（某党〈国民党〉、第三党、改組派、社会民主党、取消派等）、あるいは個人は全て革命の敵」とした上で、「十月革命一五周年記念、及び中華ソビエト中央政府成立一周年記念勝利をかち取るためにまさに闘争している時に、反革命取消派は公然と某党の懐の中に入った！　取消派は某党と共同陰謀の下で、……革命を破壊した」[18] とし、陳らの逮捕は実は国民党とトロツキー派が結託するための茶番劇とみなしている。第三に、北方トロツキー派機関誌『先鋒』（通訊処は北京大学）は、当然、陳救援を訴える。「中国革命の領袖、中国共産党の創始者、左派反対派の指導者陳独秀は、すでに残酷な国民党に逮捕された。このことは左派反対派の損失であるのみならず、同時に中国革命全体の損失である」。陳救援のために「即刻、中国共産党左派反対派に加入せよ！」[19]、と。

こうした中で、注目すべきは第三勢力、知識人の動向であろう。例えば、全救連代表者で、後の「抗日七君子」の一人王造時は「共産党の盲目的暴動には賛成できない」としながらも、「法律の手続きによって初めて判決できる」と強調し、陳らを①法廷に出す、②裁判は公開、③被告らは弁護士を要請する権利を持っている、④脅迫によって自白させるべきではないと提起、かつヌウラン夫妻と同様に法によって解決でき、鄧演達式の解決方法（銃殺）を採るべきではないと強調し

た。[21] このように、法によって裁くことを強調するとともに、外国人と同様に扱うことを主張したのである。王のみならず、当時北平にいた胡適、上海にいた蔡元培、楊杏仏、林語堂らが国民政府、国民党中央に「人材を惜しむ」等と打電した。宋慶齢も蔣介石に面会を求めた。[21] 陳逮捕も大きな契機として三二年一二月上海で組織されたのが、中国民権保障同盟である。参加者は宋慶齢、蔡元培、胡適、王造時、沈鈞儒、魯迅、林語堂、及び米人トロツキストのアイザックスらであった。その活動は①国内政治犯の釈放と不法な拘束、残酷な刑罰、殺害廃止のために闘う、②結社、集会、言論、出版の自由等であった。保障同盟が第三勢力、知識人の結集体として多くの政治犯救済に奔走したことは周知の事実である。

結局、陳独秀らは江寧地方法院で公開裁判が行われた。「危害民国案起訴書」の「陳独秀部分」では、新文化運動、中共総書記時代の陳を説明した後、上海で中共左派反対派を組織し、さらに北平、天津、広州、香港等に支部を組織し、手分けして活動した。ただ、経費に限りがあり、工会、学生運動に参加できただけで、農会方面は党員もかなり少なく拡張する術がなかったとした。[22] 第一回審理で、陳は国民党打倒を目的とする理由を聞かれ、①国民党政治は銃剣政治で、人民、おそらく党員も発言権なく、民主政治の原則に合わない、②中国人はすでに極点まで困窮しているのに、軍閥、官僚は金銭を集めることを知るだけで、「高麗」亡国時の現象と同じである、③全国人民は抗日を主張しているのに、政府は一歩一歩日本に譲歩し、上海で十九路軍を支援しなかったという三点をあげた。[23] 公開裁判の結果、陳と彭述之は懲役一五年、濮徳治、羅世璠、王子平、宋逢春、何資深は懲役五年、彭道之二年半、王平一、梁有光は無罪であった。梁の無罪理由は不明であるが、王平一は出獄と同時に「反共宣言」を出し、国民党に投降した。また、彭道之は看守所で病死。陳らは弁護士の勧めで最高法院に上告し、陳と彭のみが八年に減刑され、他は五年のままであった。かくして、刑が確定し、南京の老虎橋監獄に入った。

陳逮捕後、上海でトロツキー派が大分裂し始めた。①一小部分は中共に投降し、悔悟を表明した。②大部分はマルクス・レーニン主義を捨て、社会民主主義の信徒となった。③王芸林は公然とトロツキー派を離脱し、マルクス主義学会を組織

し、実際活動を停止した。北方でも同様で、楊凱グループは自己の錯誤を認め、中共に党籍回復を要求した。[24] また、トロツキー派の内部機関誌『校内生活』によると、陳の威信と経済的維持により上海各区機関は存続し、機関報も経常的に発行していたが、陳逮捕後、区委は消滅し、機関報も出版する術がない。同志、区委、指導機関の間の連絡は断絶した。また、上海の組織は腐敗し、規律も緩み、会議もしばしば召集されていない。そこで組織整頓のためにプロレタリア分子を増大させ、同志の政治水準を高めることが主張された。当面の工作として①過渡期の民主スローガンを用いて広範な大衆と連携する、②世界恐慌と農村破産等が造成した都市の失業現象を鋭くつき、一方で失業救済団体等を公開組織して大衆に接近し、他方で労働者を指導して新たな一切の搾取に反対する。③国民党政府の日本への投降を随時随地に指弾する、[25] と。また、雪衣も「プロレタリア階級が政権を掌握する以前、民主主義運動を放棄することはマルクス主義(者)の策略ではない。……ブルジョア民主主義は歴史を推進する一種の動力である」とし、従来の過渡期路線の踏襲を再確認している。[26]

この後、改組を繰り返し、劉仁静、厳霊峰、陳其昌、任曙らによりやっと上海臨委を設立することができ、トロツキーの指示により劉が書記に就任した。だが、動揺は収まらず、三三年九月代って任曙が書記に就任し、北方トロツキー派代表も召集し、上海臨委を「全国臨委」に改組し、上海各区委を解散し、上海市委とした。かくして〈書記〉劉伯荘、〈宣伝〉厳霊峰、〈組織〉任曙、〈委員〉趙済、李平らの新執行体制を確立した。だが、李平は逮捕され、国民党特務の秘密裁判で投降を拒絶したため銃殺された。[27]

ところで、同時期、世界反戦委員会(総部・パリ)が上海で極東反戦会議開催を決定した。三三年八月中国側主催者・宋慶齢が欧州代表一行四人を出迎えた。その時、彼女は「帝国主義戦争反対」を声明し、独、日、英、仏、米の軍備拡張により世界は戦争危機に直面しており、日本の中国侵略はその一環との認識を示した。中国トロツキー派は宋慶齢の呼びかけに応じ、党派にかかわらない「統一戦線」重視の立場から全面参加を決定した。だが、国民党の妨害にあったため、秘密会場は中共地下組織が按配することになり、かつ中共からトロツキー派の元中共党員に復党の誘いがあったが、例えば、

彭述之の妻陳碧蘭は拒絶し、トロツキー派の立場を堅持したため、結局、彼らの参加は実現しなかった。[28]

同年一一月福建人民革命政府（以下、人民政府）が成立した。三池亥佐夫は、大会には社会民主党、第三党、トロツキー派、国家主義青年党等の代表一二八人の闘士が集まったとする。[29]では、具体的にトロツキー派は人民政府といかなる関係にあったのか。福建事変が勃発すると、全国臨委はすぐに人民政府に参加させるため、宣伝委員厳霊峰を派遣した。厳は人民政府情報処副処長、及び生産人民党党務責任者に就任した。厳に続いて任曙や杜畏之も福建に向かった。[30]この時、厳は人民政府駐在中共代表の潘漢年と接触し、「反蔣抗日」の合作を建議したが、失敗に終わった。

ここで、トロツキー派の人民政府に対する見解を知るため、全国臨委「福建事変宣伝大綱」（三三年一二月）を検討したい。まず、国民党政府を「大資産階級、地主、買弁、豪紳、軍閥、官僚の独裁政権」とみなし、人民政府樹立は資産階級内部の政変とし、民衆の民族・民主要求、反国民党を潜在力が社会統治階級に反映したものと位置づける。〈政変に対する態度〉人民政府を「連合戦線運動」と見なし、①積極的、組織的に運動を呼応する、②指導的役割をかち取り、民衆が領袖を、政治が軍事を支配する形態に改める、③労働者大衆を発動、組織する、④組織、政策の独立と批評の自由を妨げず、一切の革命勢力と連合戦線を成立させ、全国的に発展させ、国民党独裁とファシストに反対する。⑤全力を集中して全国、とりわけ都市における「民主戦争」を発展させる。〈宣伝要点〉①民衆に今回の政変の過去の一切の政変と異なる意義を指摘する。②福建政変提出の政綱は、大部分が中国民衆の最低で最も切迫した要求である。③反帝、特に反日を強める。④スターリン派が農村に偏向し、都市、民族・民主闘争を無視する孤立政策の誤りを改め、共同で全力を集中し、この運動を発展させることを要求する。〈スローガン〉①抗日を継続すると同時に、一切の帝国主義に反対する、②失地回復と一切の不平等条約の廃止、③国民党政府打倒、④言論、集会、結社、出版、罷工の自由、⑤政治犯釈放と人民圧迫の一切の法律廃止、⑥直接普選による全権を有する国民会議の召集、⑦土地革命、⑧労農、及び一切の労苦民衆の生活改善、⑨土地、鉱山、森林、河道、及び重要企業の国有化、⑩国民党軍隊の福建、江西（中共地区）への進攻反対等であった。[31]

これを人民政府の「人民代表大会口号」「人民権利宣言」[32]と比較すると、両者は、抗日を中核とする反帝、国民政府打倒、自由権要求等はほぼ完全に一致しているといってよい。土地、重要企業等々の国有化は人民政府がまず打ち出した政策と考えられるが、当然これは孫文・民生主義を踏襲したもので、元来、社会主義的政策であり、トロツキー派としても異存はない。差異はトロツキー派が「組織、政策の独立」等に見える連合戦線での党派間民主化、都市、民主運動、労働者等にウエートを置いている。国民会議を継続して主張しているのは、人民政府を地方連合政権と位置づけ、国民会議を全国性の連合政府と位置づけているためであろう。これに対し、人民政府は第三党の意見が反映し、「生産人民」として農民、労働者の双方を重視し、特に孫文の「耕者有其田」の延長線上にある「農地耕有」「計口授田」等の農業政策を有しており、かつ明白な形で民族資本発展を目指していた。つまりトロツキー派は民主化、運動論を重視し、人民政府は政権担当者として実現可能な形で行政、政策面を充実させたといえる。

ただ、人民政府は数カ月で崩壊し、その時、厳霊峰は国民党に逮捕され、「反トロツキー、反共」声明を出し、国民党に投降した。三四年三月新常委は、一転して①福建事変の性質は相変わらず一種の軍閥の奪権闘争で、②全国臨委が資産階級を革命的と考え、福建政変の党派を「革命の連合者」と認めたことは誤りであり、③今回の教訓は、資産階級政党との共同行動、あるいは連合戦線方式は永久に放棄すべきである[33]、と結論づけた。このことは、従来の連合戦線追求の姿勢の大転換であると同時に、理論的にも実践的にもトロツキー派が完全に孤立し、歴史的役割を果たす時代を終え、かつ同派における陳独秀の影響力が急速に失われていくことを意味した。

他方、中共は三三年一〇月、十九路軍と「反日反蔣初歩協定」を締結し、軍事行動の停止と相互不可侵を決め、「反日反蔣軍事同盟」の結成を準備するとした[34]。だが、人民政府成立から約一カ月しか経っていない一二月、中共中央は、人民政府が何ら反帝反軍閥の実際行動をせず、「人民的」でも「革命的」でもないことを証明している[35]、と早急すぎる不満を述べ、蔣介石による攻撃の際、協定締結にもかかわらず人民政府を支援せず、三四年一月それが崩壊すると、中共中央は

以下のように決めつけた。人民政府の歴史はまさに反革命改良主義の歴史で、第三の道を追求した者の歴史である。福建に集まった一切の中国の反革命改良主義集団と党派は、国民党内部の反対派、生産党、第三党、社会民主党、AB団からトロツキストに至るまで、李済深、蔡廷鍇から胡秋原まで、「反帝反蔣」の非常に多くの美しい空論を主張した。人民政府の一切の行動は動揺、躊躇、投降、裏切り、妥協と失敗主義の行動であった、[58]と。当時、王明指導下で「中間階級主要打撃論」を採る中共中央は第三勢力の連合戦線における意義を完全否定したのである。

① 前掲『中国共産党之透視』、四一二頁。
② 仿魯、前掲史料、二三八～二三九頁。濮徳治①、八四頁等。
③ 濮徳治①、九五頁。
④ 陳独秀「此次抗日救国運動的康莊大路」『火花』一巻三期、一九三一年一〇月八日。
⑤ 陳独秀「我們争論之中心点」『火花』一巻五期、一九三一年一一月七日。
⑥ 唐宝林、前掲書、一五八、一六〇頁。
⑦ 思美「満州事変中各個反動派別怎樣擁護着国民党的統治」『紅旗週報』二三期、一九三一年一一月二〇日。
⑧ 中国共産党左派反対派「為日軍占領滬滸告全国民衆」『火花』一巻八期、一九三二年四月一日。
⑨ 彭述之「上海事変的教訓及其前途」『火花』一巻八期。
⑩ 常委「政治決議案――目前的局勢与我們的任務」一九三二年二月一〇日、『校内生活』三期、一九三二年五月二〇日。
⑪ 洛甫（張聞天）「上海事変中的取消派」『紅旗週報』三四期、一九三二年四月一日。
⑫ 康生「剷除日寇偵探民族公敵的托洛茨基匪徒」、陳紹禹等著『托派在中国』新中国出版社、一九三九年五月、六〇頁。
⑬ 「常委対於北方問題的決議」『校内生活』二期、一九三二年三月一五日。
⑭ 逮捕した当事者、国民党側史料『透視』の「一七日」（四一三頁）に信憑性があると考えられる。濮徳治の回憶②の「九月」は当然誤り。また、濮はこれを「第二次大破獲」とするが、三一年八月の「第二次破壊」があり、陳逮捕はいわば「第三次破壊」となる。
⑮ 前掲『中国共産党之透視』、四一三頁。濮徳治①、九六頁。波多野乾一、前掲書第二巻、一〇二～一〇三頁。
⑯ 波多野乾一、同前第二巻、一二〇頁。
⑰ 金玉振「由陳独秀被捕説到中国共産党分化之趨勢」『陳独秀評論』、六四頁。
⑱ 「托陳取消派首領陳独秀被捕之意義」『陳独秀評論』、一三五、一三七頁。
⑲ 「起来！　起来！　援救中国革命領袖陳独秀」『陳独秀評論』、一五六～一五七頁。
⑳ 王造時「陳独秀与牛蘭」（『主張与批評報』）、『陳独秀評論』、一七一頁。
㉑ 「論『未亡人』陳独秀」『陳独秀評論』、一六〇頁。
㉒ 前掲拙稿「『国民会議』を巡る政治力学」。

㉓「陳独秀案開審記」『陳独秀被捕資料匯編』河南人民出版社、一九八二年、一六四頁。
㉔「陳独秀被捕後的取消派」『陳独秀評論』、一六九頁。
㉕「我們対於目前工作的意見」、昌文涅「我們対於目前工作的意見」『校内生活』七期、一九三三年一一月二三日。
㉖雪衣「目前形勢与反対派的任務」一九三三年九月二九日、『校内生活』七期。
㉗㉘唐宝林、前掲書、一七五～一七七、一八一～一八三頁。
㉙三池亥佐夫「福建独立と支那の近状」『支那』二五巻一号、一九三四年一月。
㉚唐宝林、前掲書、一八五頁。
㉛前臨委「福建事変宣伝大綱」一九三三年一二月一日、中国共産党左派反対派『福建事変与反対派』(一九三四年三月一五日)所収。
㉜薛謀成等『〃福建事変〃資料選編』江西人民出版社、一九八七年、八一～八二頁。
㉝「常委対於福建事変与我們的策略之争論的決議」一九三四年三月七日、前掲『福建事変与反対派』所収。
㉞前掲『〃福建事変〃資料選編』、五七頁。
㉟「中国共産党中央委員会為福建事変告全国民衆」『闘争』三八期、一九三三年一二月。
㊱「中国共産党中央委員会為福建事変第二次宣言」『闘争』四五期、一九三四年一月。

おわりに

一九二〇年代末から三〇年代にかけて、①スターリン・コミンテルンの指導への不信と中東鉄道事件にも見られる中ソ矛盾、②経済恐慌による農村破産、③九・一八事変を契機とする帝国主義列強内での対日矛盾の突出を背景に、中国共産主義運動には二つの傾向が現れた。一つは中共で、動揺しながらも原則的にコミンテルンの指導を受け入れるが、同時に都市暴動を試みながらも農村型革命へと重点を移し、農民が圧倒的多数を占める農業国家・中国に適した革命に打開の道を見いだした。すなわち、反日も鼓吹するが、実際には当時、国内・農村問題解決に力点を置き、土地革命を梃子に農民を革命の原動力とすることで、中国革命を最終的に勝利に導く方向を切り開いた。だが、中共は第一次国共合作期の国民会議・連合戦線政策を始めとするブルジョア民主主義的な諸政策を「右翼日和見主義」として切り捨て、また、山岳・農村を根拠地としたため、実質的に民主・民族主義の観点に立てず、都市に適応できない政党になった。それに対して、もう一つの傾向を体現する中国トロツキー派はコミンテルンの指導を拒絶し、ソ連との民族矛盾にも敏感に反応した。また、

上海、香港に基盤があったため、労働運動の低調を直接実感でき、単純暴動主義批判の急先鋒に立った。そして、陳らは革命情勢になく、「資本主義社会」が確定したにもかかわらず、ブルジョア民主主義の課題が未完成との認識から、国民会議要求を中核とする都市型闘争を継続し、都市諸階級との競合、連繋の中で中国革命の達成を目指したのである。そして、対外矛盾を上海で直接感じたため、抗日ナショナリズム的発想に立つことができた。だが、農民組織化や土地革命等に言及するが、農民を従属的位置に置く意識から脱却できず、理論的にも実践的にも、また力量的にも農民の中には入り込めなかった。こうした圧倒的多数の農民を実質的に無視、あるいは軽視したトロツキー派の路線は、確かに中国革命を勝利させることは不可能であった。しかしながら、以下のことだけは指摘しておかねばならない。当時の中国共産主義運動を総合的に見ると、農村、都市の双方をカバーできる勢力は生まれておらず、実質的に農村型闘争方式を採るか、都市型闘争方式を採るかの二者択一を迫られていたという事実である。つまり、中共とトロツキー派の主張、対立点がいかに大きく見えても、結果的に農村と都市を分担し、相互補完関係にあったといえるのである。

トロツキー派は共産主義者として社会主義革命・第三次革命を構想している。だが、「将来」の第三次革命まではブルジョア民主主義の実現を主要任務としていた。このことは第一次国共合作期から続くブルジョア民主主義の流れを継承したことを意味し、孫文思想の継承を明確にした第三党を始めとする第三勢力との接点を容易に見いだすことを可能にした。さらに、トロツキー派幹部は労働者を評価し、知識分子等を批判したが、労働者出身の馬玉夫等を除けば、幹部自体が主要に知識分子であった。こうした経緯から当初、第三党、改組派を経て無産者社に加入し、陳逮捕後、ある部分の社会民主主義者への転換が容易であったのである。また、ナショナリズムを背景に、九・一八事変の際、民族資本家を含めた「民族統一戦線」の主張、第一次上海事変での十九路軍への支持、人民政府の歴史的意義を正当に評価し、自ら参画した。それ故、王造時ら第三勢力が陳逮捕の際、救出を望んだことは必然的であった。このことは陳の立脚点が労働者というより、むしろ第三勢力、知識分子にあったことを明瞭に示している。その上、三一年一月「綱領」で自らを「中間左派」と位置

づけるが、「左派反対派」の自称と異なり、この時期、実は中共より「右派」に位置しており、都市型共産主義運動であると同時に、中国共産主義運動の中で最も第三勢力に近い位置にあったのである。

トロツキー派は一貫して国民会議・連合戦線を主張し、時には中共にまで合作を呼びかけた。その主張は抗日ナショナリズムの一点で、思想、信条、階級等を問わず連合するというもので、中共は常にトロツキー派批判を前提として要求したため、相容れることはなかった。しかし、トロツキー派が第三党、国家主義派、改組派等の第三勢力諸党派と共に、ナショナリズムを共通項とする各々の抗日連合政権構想を主張し続け、人民政府樹立の思想的、運動的背景を生みだした意義は看過できない。[①] つまり中共が連合戦線政策を放棄した後も、トロツキー派によって共産主義勢力側からの連合戦線構想は維持された。そして、その流れは両広事変、西安事変を誘発し、さらに第二次国共合作・抗日民族統一戦線に繋がっていった。だが、トロツキー派自体は人民政府崩壊を最後に、連合戦線追求の姿勢を完全に放棄した。三七年八月陳は出獄するが、その後、ナショナリズム的観点から第二次国共合作、抗日民族統一戦線を支持し、「一致して国民党の一党政権、及びその抗日戦争に対する軍事最高統帥権」を承認し、中共、その他党派は野党の資格で抗日戦争を絶対に擁護することを強く訴えたが、[②] すでに「国共妥協」を非難するトロツキー派への影響力を失っていた。[③] すなわち、トロツキー派は国民党打倒を主目標に掲げ続け、第二次国共合作に至っては全く理解できず、地主、資本家から華僑に至るまで抗日のために統一する上で、蔣介石・国民政府の有する政治的力量、糾合力、及びその歴史的役割を正確に評価できない状況に陥ったのである。

① 前掲拙稿「『国民会議』を巡る政治力学」。

② 陳独秀「抗戦中的党派問題」一九三八年二月、『陳独秀著作選』上海人民出版社、一九九三年、四四五頁。

③ 「トロツキー派を解剖する」『興亜資料月報』一九三九年一二月、三四頁。

（大阪教育大学助教授）

The Influence of the East Asia Youths' League (əsha. luŋɛ) on Burmese Independence Movements

by

TAKESHIMA Yoshinari

This paper attempts to explore the significance of Japanese occupation in Southeast Asia by examining the role of the East Asia Yorths' League (əsha. luŋɛ), formed in Burma under Japanese rule. Though an institutional analysis, the process of the League's formation and growth into a large, popular organization with a membership of fifty to sixty thousand is chronicled. During the post-war period, the League became one of the most powerful organizations in Burma and contributed to the AFPFL's resistance to the British Empire. Because nationalist leaders such as Bogyou Aung San confessed that prior to the war the popularization of the Thakin parry had been exceedingly difficult, the significance of a popular mass organization such as the League should be manifest. In short, the League helped propel the cause of Burmese independence.

The Origin and Development of the Trotskiites in China

by

KIKUCHI Kazutaka

The Trotskiite faction of the Chinese Communist Party was primarily composed of those Chinese who had studied abroad in Moscow, and followers of Chen Du-xiu (陳独秀), who had been expelled from the Chinese Communist Party. In their struggle against Stalin and the bureaucratic control of Comintern, the Trotskiites emphasized democracy, and furthermore increasingly criticized the Soviet Union for promoting its national interests at the expense of world communism. Although the move of the Chinese Communist Party from urban areas to the countryside was to lay the groundwork for the ultimate success of the

revolution, this was achieved at the expense of democratic principles. By consrast, the Trotskiites remained in large cities such as Shanghai and promoted democratization based upon the believe that Chinese society, although capitalist, had not yet developed a mature democratic system. Of course, one could criticized the Trotskiites for overemphasizing the proletariat and ignoring the plight of the peasantry in a rural nation such as China, but at that time, there was no organization in the Communist movement capable of integrating urban and rural districts. The Trotskiites and the Communist Party essentially took on mutually complementary roles of organizing town and countryside. After the Manchurian Incident of 1931, the Trotskiites strengthened their anti-Japanese nationalism, and encouraged people to organize the United Front. Most significantly, the Trotskiites joined hands with the Third Force, and thus created the momentum which would bring about the Fujian People's Revolutionary Government (福建人民革命政府), the Xian Incident, and the Anti-Japanese United Front.